

<論文> 「蝮のすゑ」論

服部, 一希

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

40

(開始ページ / Start Page)

64

(終了ページ / End Page)

74

(発行年 / Year)

1989-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019568>

「蝮のすゑ」論

服部一希

武田泰淳は、しばしば地上世界に起こるありきたりな日常的現実を素材として作品を組み立てはじめるのだが、彼は、それをやがて想像力のもつ激烈な運動によって、形而上学的な白熱状態へと変容させてしまう。われわれが、眺めていた世界は、突然にその形姿を変貌させる。荒々しいむきだしになった何ものかへと変形されるのだ。人々が、極限状態と呼ぶこの形而上学的次元への踏み越えは、武田泰淳の想像力の動きや小説創造の意味、思想的課題といったものを考察する上で語ることを避けるわけにはゆかないものである。

彼は、日常的世界をかく在らしめている不可視不可触な現実を形あるものに変形させるべく努める。言い換えれば、人間的現実をはっきりと浮かびあがらせるために、目で見ることも耳で聞くことも可能な世界を越境しようとするのだ。想像力は、この極点にむかう運動のもとで様々な傷手を受けたり、その醜い姿を作品に残したりもするのだが、この精神的冒険を断平として貫こうとする。

しかし、形而上学的思惟と小説的創造力とが一体化したこの緊張

状態は、さらに遠くまで及ぶ。彼は、可視的な現実をかく在らしめている不可視の現実を、目に見えるものに変えようとするだけではない。人間にとっての限界、可能性の極限ともいべきその境界を踏み越えようとさえするのだ。

こうして、われわれは、彼が創造する人物に負わされた定めやそれに生命力を与える想像力の脈動の意味を説明することができる。

彼の創造する人物は、可能性の極限にむかってその歩みをとめることができない。しかも、その重荷を背負うのは、頭の鈍い生臭坊主であったり、抜け目なく立ち振るまうエロ作家であったり、独り汚ない下宿で酒びたりになる代書屋でなければならぬ。なぜなら、最も△転回▽しがたい人物を△転回▽させることに成功するならば、あらゆる人間に登攀可能な道がそこに開けるに違いないからだ。

醜悪で下劣な人物は、人間存在の限界まで行き着き、そこで内的な転生を遂げなければならぬ。作家にとってその成功の可否、彼が創造する人物が作品の中で生き生きと存在しうるかどうかは、作品

がつくりものめいた、非現実性を退けたときにはじめて知ることができるのだが、そうした可能性の極限まで歩むことが、想像力に課せられた野望なのである。

ところで、このような想像力の運動は、つぎのようなことを可能にする。つまり、作中人物は、人間という身分に許される限りで存在の可能性の探求という困難な営為を知らぬ間に担うのだが、そうすることによって、彼は人間的実存の全幅を生き抜くべき宿命を必然的に要請されるために、多次元的な世界を明らかにするという使命を想像力によって委ねられる。彼は、多次元的な拡がりをもつ人間的現実をリアルに浮かびあがらせる力として生きようとするのだ。

だが、このような性質をもつ自己存在の揺動、つまり様々な逸脱や忘却や逆行や跳躍の動きは、他者との根深い交流によって惹き起こされる。少くとも武田泰淳は、そう考えている。従って、作中人物は、他人との間に容易に断ち切り難い関係を結ばねばならぬ。その矛盾の極限まで桎梏にも似た結びつきを逃がれないのだ。このような人物の交流は、人が人間的な感情や知性と呼ぶ豊かな輝きを無効にする地点にまで作中人物を追いつめることになる。それと、いうのも、武田泰淳は、たがいに個体としてひき裂かれてもいれば、相互に交流すべく条件づけられてもいる人間相互の関係をぎりぎりまで押し進めることによって、人間存在の可能性が、明るみにとると考えているからだ。

自然が与える感覚的な美しさや人間的感情のもつ光輝を、彼が作品に導き入れなかったわけはいまや明らかに。形而上学的志向

は、すべての存在物を根元において捉え直し表現することを要請するのであって、それは、知覚的世界の布置を焼き尽くし、人間性に奥深く潜んでいる暗く謎めいた力を惹き出そうと努める。

武田泰淳の小説にあっては、存在が人間的情念を身に備え、知性を装備し、様々な行為をやったのけるかのようだ。彼は、人間という存在を表現しようとしたというよりも、むしろ存在としての人間を表現したということができるだろう。様々な人物や出来事は、そのような次元で形を与えられるのである。

他人の存在を無視してどこまでも押し進められる、独自のな会話とでも呼ぶべき数々の奇怪な対話、作中人物の分裂矛盾する生の諸相とその対立抗争、存在感の喚起を主眼とした表現方法などは、かくして、武田泰淳の文学的思索の必然性に根ざしたものだ、ということになる。

『腹のすゑ』は、武田泰淳が、戦後初期にまとめあげた作品だが、彼はその舞台を敗戦直後の上海に求める。われわれは、この作品を読むことによって、歴史的な運動のうねりのようなものを味わうだけではなく、人間と世界の貌を同時に経験することになる。

われわれが、これから論じようとする人物は、あらゆる種類の精神的物質的な廢墟の中を生きている。絶対なる権威と権力を誇っていた国家権力の崩壊は、安堵や歓喜を人々にもたらすのではなく、不安と恐怖のうちに人々をとらえる。

生活上のリアリズムが、すべてを押しつけようとし、人間的思惟は、野獸的の欲望に奉仕するか、さもなくば、官宦的知恵へと下落する。人々は、混迷のうちに沈む無秩序な都市にあって、至るところ

ろに暗く陰惨な網目をはりめぐらし、悲劇的な抗争の予感をはらんだ生活に何のためらいもなく住みつくようになる。すなわち、錯綜した利害関係に操られたどす黒い淫蕩を機軸として、倫理的感覚の極度に麻痺した生活、狡智と卑屈を律動とするエゴイズムとそれによる血腥い抗争、処罰を免れる数々の犯罪や目に見えぬ殺人が、人間と人間との関係を結びつける紐帯のような役割を演じる。人々を衝き動かす暗く謎めいた力は、悪意や悪徳の産物というだけではなく、甘美な夢や素朴な希望、冒瀆的な汚れを含まぬ自然的な欲望から生まれるものでもある。孤独と不安と無力と昏迷によって脅かされた生活を打開しようとし、あるいは、そこから逃避しようとする企てが、人々を殺伐と苦難の淵に引きずり込み、どのような解決も与えられない破滅的な抗争へと導くのだ。

われわれの主人公は、そのような混沌たる都市における人間的現実を具現する人物として焦点をあてられる。独り汚ない下宿で陰鬱な生活を送っているこの人物は、世俗的な価値に従って生きようとしているのだが、そんな自分を醜悪で存在理由なきものとも見做しており、できればこの世から自己の存在をもみ消してしまいたいと思っている。彼は、自己も他者も世界も信じることができない。不信と懷疑と虚無が重たく滞留する彼にとって、最も望ましい生き方は、他人や世界との関わりを外に身を置いて生きることだ。極度な精神的仮死状態、存在感の稀薄さのなかで、彼はこんなふうにはなってみる。だが、このような存在選択は最後まで現実のものとはならぬままに終わる。生の本能的な力は、このような想念や欲求をひき裂き、彼がこの世にとどまりつづけること、しかも最も世俗的な方

法でそれを行うべく強要するからなのである。彼は、自己存在の無気味で抵抗しがたいこの力に、冷たいまなざしを突きつけたり、不快や嫌悪で身を振ろうとさえするのだが、思うようにそれを処理することはできず、絶えず自身の無力を意識するにすぎぬ。この矛盾は、彼の存在に重苦しい印象を与えるが、一方で絶望や悲惨とひどくかけ離れていた印象を与えることもまた確かである。それというのも、彼は、生の本能的な暗い力を否定する一方でそれを肯定してもいるのであって、ひそかにそれに身を委ねているからなのである。

彼は、歪曲する意識だ。彼は、無関心で無感動な虚無的状态が、人間や世界に対する不信と懷疑に由来すると考えている。だが、それは生の断念や否定に行き着く形而上学的絶望によって惹き起こされるのではない。それとは全く逆に、生きつづけに在りつづけようとする截断しがたい執念によって生みだされるのだ。彼は、生きて存在することを望んでいるとともに、それを強烈に感じさせる歓喜や陶酔に身を溶かしてみたいと思っている。それを可能にするもの以外の何も彼の興味や関心をひかない。だからこそ、彼を取り囲む様々な出来事や物は、厚みを奪われて凍結してしまったかのように感じられるのであり、他人の不幸や苦悩の数々を自己の利益のために冷酷非情に処理することもできるのだ。

アルコールの暴飲は、そうした隠された欲望の根深さを顕在化してみせてくれるようだ。酩酊は、生命力が膨張するような感覚を人に与える。彼は、アルコールを多量に体内に流し込むことで、生きていることを強く喚起するあの瞬間へ到り着こうと企むのだ。

かくして、われわれの主人公は、三つの分裂矛盾した世界を生きていることになる。彼は、歪曲する意識であり、野獸的狂熱のもつ暗く底知れぬ力であり、知性による冷酷な打算のまなざしである。

武田泰淳は、作中人物を分裂矛盾する在り方のもとに置いた。作中人物は、そのために、八存在論的葛藤Vとでもいうべき試験に身を投じないわけにはゆかなくなるのだが、悲劇と転生のドラマは、まさしくこの形而上学的葛藤を起爆剤として展開する。

作品は、酩酊によって野獸的な狂熱へと足を踏み入れはじめていた代書屋が、美しい人妻に性的灼熱を感じる暗く背德的なイメージを印象づける場面からにわかに動きを与えられる。彼は、人妻が撒布する魅力に屈服するまいと努めるが、執着を徐々に深めてゆく自分を発見したりもする。やがて、人妻の不幸な打明け話に見え隠れする打算や非情さなどどうでもいいものに思われるようになり、抒情を軽蔑し他人との関わりを拒絶する生活態度も廃棄するようになる。なぜなら、この人妻が醸し出す魅力は、憂鬱な現状から彼をひき離し、陶醉と歓喜の世界に連れ去ってくれるように思われるからだ。

代書屋は、こうして、利害の錯綜する複雑な関係のもとに自らを投じることになる。彼は、いかなる倫理的な感覚も覚えることなく、人妻に述づくことになるのだが、それは、彼が野獸的な狂熱へと踏み越えていたためばかりではなく、彼に委ねられた独自の位置によるためでもある。

人妻とその夫は、かつて国家権力の中枢にいて彼ら二人を支配した一人の戦犯に現在もなお拘束されつつづけている。この零落した権

力者は、金品を与えて二人の生活を支えているのだが、人妻の魅惑的な肉体と存在におのれの所有権を認めてもいる。人妻は、この男の支配から何とかして逃がれたいと思っている。代書屋が、依頼されるのは、この脅威的な人物による支配から二人を解放することだ。しかし、この脅威的な人物の存在なしには、生活を営むことができず、この人物が存在するかぎり奴隷的な境遇に踏みとどまるほかない屈辱と悲惨から一組の旧商業ブルジョアジーの夫婦を救済することは、この人物をこの世から追放し、自分が代わりにその男の役目を引き受けることを意味する。なぜなら、驚くほど権威主義的なこの男は、おのれの権限を侵害する人物は容赦なく追放する構えであるし、人妻は、杉が辛島の役割を引きうけることを望んでいるからだ。

こうして凡庸な欲望を端緒とした他者との結びつきは、驚くべき試験と悲劇へと変質する。代書屋は、一人の人間の存在権を奪うことなしには、一組の夫婦を窮地から助けだすことはできず、もしもそれを拒絶するならば、この夫妻を奴隷的屈辱のもとに留めておかねばならぬジレンマの前に立たされる。だが、それにしても彼がこのような務めを担う必然性は、はたしてどれほどあるのだろうか。人妻への執着が、そこで大きく働いていることは確かだが、性的欲望と殺人が、必然的な結びつきをもたぬこともまた確かなことである。主人公がわれわれに示す決断とその挫折、逡巡と逃亡の企て、詭弁と無知による自己弁明といった様々の紆余曲折した動きは、このような疑問が、われわれだけではなく主人公を、そして作者をも深く困惑させたことを示している。主人公は、やがて、自己の存在

とその意識とのずれを徐々に解明してゆく一方で、ある決定的瞬間への踏み越えによって逃避すべきいっさいの手段を剝奪される地点にまで追いつめられるのだが、作品は、到るところが迷路であるような境域を彷徨う主人公の紆余曲折した歩みを通して、この極限的な瞬間へと歩みを進めるのだ。

夫婦と会う機会を重ねるうちに、彼を取り囲む状況ははっきりとした形で浮かびあがって来るようになる。彼は、人妻が間歇的に促すヒステリックな行状、夫の癒しがたい悲痛な心境、辛島の執念に充ちた恐るべき殺意を知るとともに、夫婦生活が崩壊寸前の状態にありながらも屈折した愛で二人が結びついていること、夫の死が間近なことをも確信する。そして、彼は、自分の置かれた状況の重みを直に感じ取るとともに、人妻への執着を強めている自分をも発見する。

だが、それにしても杉と深く結びついたこの夫婦は、いったい何者なのだろう。夫は、病苦と貧困と屈辱で埋もれた悲惨な境遇から脱け出し、おのれ自身の為すべき行為を試みたいと考えている。だが、一方で彼は狡猾で卑屈な野心のうえに生きてもいる。かつて国家権力の庇護のもとで莫大な利潤を手にしたと思われるこの男は、権力が顛覆することによって、思いがけない方向転換を強いられる。奴隷の快楽は屈辱に、従うべき主人は、呪詛と怨恨を投げつけるべき存在に転化する。こうして戦犯として処刑されるべき運命に律せられ、いかなる利益も期待できない辛島を、この世から追放したいという激烈な欲望と、いままでは侮蔑すべき存在であった杉への接近という事態が起こることになる。彼は、つぎつぎと自分の

妻が姦通する苦痛に耐える悲劇的な人物であるとともに、妻の肉体的魅力を使って辛島殺害を目論む悪魔性を兼ね備えた人物だ。

だが、われわれが注目すべきは、彼の存在の仕方がもつ独特な性格である。彼は、他者におのれの権限と責任の一切を委ね、その奴隷状態とひき換えに自己の安泰と免罪符を譲り受けようとする。おのれの意図を現実化する際に取る彼のこうした態度は、歴史的転変にあっても不動のまま留まろうとしている。杉への接近は、われわれにそのことを暗示するかのようだ。

辛島が殺害された後、夫は杉にむかってつぎのように言う。〈僕のような人間、何も出来ずに寝ているだけの人間、他人まかせの、無責任の、虫のいい病人のために、人間を殺すようなことがあっても良いものかどうか、自分のために殺人が行われ、それで私は満足し、安心していられるかどうか。僕は急にいてもたってもいられない、苦しさ恥ずかしさ、すまなさがこみあげて来て、泣いてしまいました。(中略) あなたは私たちが不幸でなかったら、僕が身うごきできぬ病人でなかったら、こんなことはせずにすんだんですからね、僕は病人でいたくない、病人であることを特権として、恥知らずに、他人まかせでいたくない。なおりたい。責任を持った行動がしてみたい。一度でいいから、杉さんのように、なすべきことがしてみたい。〉

誠実さや良心を強く感じさせる言説の間隙から、免罪符をそっとしまいこもうとする欺瞞的な態度が同時に浮き彫りにされる。病いによる不自由さや無力さは、間接的に殺人に加担した自己の罪を蔽い隠すための手段として巧妙に用いられている。彼の告白は、自己

弾劾が自己弁護でもある両義的な性格を本質としている。それが意図的なものであるか否かは、ここでは問題ではない。われわれが注目すべきは自己が決して罰せられることはないという安堵感の上になつて自己弾劾がなされていることである。

外見こそ違っているにしても人妻もまた夫と極めて酷似した態度をもつて生きている。かつて権力を振った戦犯は、この美しい人妻に測り知れぬ愉楽を味わせた。圧倒的な権力、豊かな経済力、生命力の躍動が与える一種不思議な力は、この人妻の生命力を異様なまでに沸騰させるものであつた。権力の潰滅状態は、再びあの歓喜や陶酔や充実さのうちに溶けこむことが不可能であることを彼女に告げ知らせる。現在、辛島が与える経済的援助や性的快楽は、きわめて貧しいものだ。なぜなら、彼女が求めるものは、急場しのぎの生活の安定でもなければ、性的欲望の充足そのものでもなく、生きていくことを強く感じさせる形而上的な灼熱状態であるからだ。辛島は、いまや自分を蹂躪しつづける憎悪すべき存在にほかならず、従つて抹殺されるにふさわしい人物だ、ということになる。

およそ夫婦とは呼ぶことができない崩壊した生活を営むこの男女は、その根底では奇妙にも共通の志向に従つて生きている。二人は、辛島に代わつて自分たちの生活や欲望を充足させてくれる人物を探し求めている。歴史的現実の急激な変化は、彼らから途方もない数々の利権や特権を奪い、抛りどころなき生活による不安と恐怖の底へ叩き落としたが、この夫婦の存在の仕方を転回させるには至らなかつた。二人は、戦中も戦後も、隷属すべき人物を求め、自らの存在権を確保しようとする。

主人公は、或る日偶然にも非在たるべく望まれた元権力者（辛島）に出会う。戦犯として処刑される運命にあるこの男は、死の脅威に曝されることで、驚くほど内省的になり、予言者のような印象さえ与えるまでになっている。彼は言う。自分が処刑されるのは、当然の報いだ、自分が死んだとしても、自分のような存在は、繰り返し蘇るのだ、と。杉は彼の言説から戦時中に見られたあの科白めいた虚偽が消え去っているのを知るが、同時に、他人の存在を情容赦なく排除しようとする傲慢な態度が、戦争期と全く同じように彼を支配しているのを知る。彼は、反撥し嫌悪する。だが、敗戦が知識人と政治的支配層との関係を無効にした現在、彼と抗争することにはどんな意味があるう。

杉の中のこのような心の動き、滑稽さと虚偽とが混雑した知識人意識は、自己の置かれた状況や為すべき自己の行為を彼の視野の外に追いやり、逃げ道をつくりだそうとする意図さえ含んだ詭弁によつて、問題の本質を蔽い隠してしまう。しかし、われわれは、欺瞞に充ちた内省や逃亡の企てではなく、そのような詭弁を可能にしている根本を明らかにしなければならぬ。代書屋が、決定的な行為へとむかうことを妨げているものは何であろうか。

主人公は、まさしくこのような命題を背負いながら、人妻と対することになる。美しい人妻を仏祖界に連れ去ろうとする辛島の思惑と執念は、代書屋にすさまじい打撃を与える。彼は、辛島の執念によつて、それまで明確な形をとっていなかった存在意識が、動かし難い確かさで突如浮かびあがつて来るのを知る。彼は、自分が無ではないこと、世界のなかにしっかりと位置づけられ、なすべき何事

かにむかつて現存している自分自身を知って驚く。

メルロ・ポンティは、『ヒューマニズムとテロル』と題された感動的な書物のなかで、つぎのような示唆に富んだ見解を披瀝している。△人間の歴史を存在せしめているのは、人間が自分の権能を外に向って投ずるものであり、自己を実現するために他者と自然とを必要とするものであり▽、従って、△各人は、自分の為すことの中で、単に自分の名において行動しているのではなく、単に自分だけを処置しているのでもなく、他人をまきぞえにし、彼等を処置しているのだということであり、(中略)、我々が生を受けるや否や、我々は善き意図のアリバイを失うものであるということである。▽(森本和夫訳)メルロ・ポンティは、こうしてマルクス主義を、人間存在の存在論的制約を变革するための一手段として位置づけ、革命運動を、支配―被支配関係の撤廃という次元に限定することなく、人間存在の有限性に基づく形而上学的悪を可能な限り消滅させてゆく△価値創出▽の運動として捉える。

メルロ・ポンティが、繰り広げるマルクス主義蘇生の企ては、その根拠において、武田泰淳の文学的思索の核心と交叉する。メルロ・ポンティが、主体性の深みにおいて人間存在を、マルクス主義を捉えてみせたように、武田泰淳も一作中人物の歩みのうちに、存在論的自覚を喚起しようともくろむ。

われわれは、様々な制約や限界をもった自己存在によって、他人や自然に働きかけるとともに、それらに働きかけられもするのであるが、こうした人間存在の在り方は、他人の夢や欲求をひき裂き、その目的の実現を妨げ、究極的には、他人の非存在を要求する。生き

ていることは、他者の非存在へむけての不断の営みにほかならぬ。

だが、一方で、それは、もしも自分が存在しなければ、中絶されるか、あるいは、決して日の目を見ることはなかったにちがいない他人の意図や欲望を引き出し、それを完成することでもある。それはわれわれに不可避的なのだ。われわれは、生きて存在するかぎりこうした目に見えぬ殺人の共犯者たるべく条件づけられている。

われわれの入りこむ世界は、まるで罪なしには存立も動きも不可能なものようだ。しかし、武田泰淳は、メルロ・ポンティによる思惟の到達点をもう一步押し進めようと試みる。

罪をつくることは罰を受けることでもある。われわれは、他人の非存在を実現しようとする活動に身を委ねるとき、他者の呪詛や暴力や復讐を自己にむかつて投じてもいる。自己を実現しようとするまさにその瞬間に、自己を非存在に導こうとするわけだ。自分が、ここにこうして生きていること、それが、辛島の殺意をひきだし、夫婦の欲求を形あるものにしていくのだ。内的啓示のように彼をとらえるこの存在論的自覚は、彼の内面を大きく転回させようとする。彼は、おのれの罰でも引き受けるかのように、生きて存在することの責任をとろうとするのだ。このような選択は、倫理的な次元でなされるのではない。彼は、もっとも宿命を重たくはらんだ行為を選択することで、世界に帰属しているという確証をおのれ自身に与えようとするのだ。だが、この脱我への跳躍は、ある逆らいがたい暴力的な力のまえに無惨にも挫折へと導かれる。彼は、自らの存在の重みを受けとめながらも、熱情や意志の不在にも出会わなければならぬ。重苦しさで困惑が、しだいに彼を押し包んでゆく。そ

して、彼は、驚くべき詭弁によって自己を映し出す鏡を歪めてしまふ。やがて、私は代書屋なのだ。人の依頼で書類をつくる。それを金にする。いつも本気にならない。事件は、他人のものだ。私は主人公ではない。わき役のまたわき役なのだ。この内省には、不純物が混入していないにしても、自我の奥深くで作動しつづける欲望の動きを視野の外に追いやっていることもまた確かなことである。彼は、自己が身を置く状況を把握し、それにむかって決然たる態度で臨もうともしているのだが、自己存在のもうひとつの動きは、このような決断を無効なものにし、脱我状態に飛躍するのを許そうとはしないのだ。言いかえれば、彼は、実存的自覚であるとともに、一人の女を所有したいという暗く底知れぬ欲望でもあるのであって、熱情や意志の不在状態は、この欲望のもつ打算的な性格からやってくるのだ。彼は本当にこの美しい人妻を手離すまいと思っているのだろうか。女を失うことは、身の破滅だと断言しうるのであるか。彼が、欲しいと思っているのは、人妻の魅力的な肉体でもなければ人妻個人でもない。人妻と触れ合うことによって生ずる形而上的灼熱状態、つまり生きていることを強烈に感じさせる陶醉と歓喜なのだ。彼にとって無くてはならぬものは、この灼熱の瞬間に彼を導き入れてくれる存在なのであって、個別的具体的な他者としてのこの人妻ではない。だからこそ、彼は決定的な一步を踏みだすことができない。彼に必要なのは、人妻に対する自己の関係を究極まで見極めようとする反省的意識の労苦であり、決定的な行為へと踏み込むことを抑止している自己存在の不透明さに光を通し、自己がほんとうは何を欲しているのかをしっかりと凝視することだ。そのと

き、彼は、本当の意味で自己との闘いに身を投ずることになる。

結局のところ、われわれの主人公は、人妻を喪失するという危機的状況が、決定的な行為へと自己を促す推進力たりえぬことを是認したことになる。しかし、この挫折は、あらゆる欺瞞や詭弁を無力にしてゆく過程でもある。代書屋は、この否定的な超越の動きを、知らぬ間に担いながら、自己の本質を明るみに出す秘境にむかって歩を進めるのだ。辛島を殺害しようとする企てとその挫折は、言うまでもなくこの命題を押し開く鍵である。

彼は、困惑さのうちに揺曳しながら辛島のもとへその曖昧な足取りを早める。突然、彼の視野に倨傲に充ちた辛島の姿が映りはじめ。低温状態にあった代書屋の精神は、にわかには沸騰しはじめ。そして、彼は突発的にこの抹殺すべき存在がけて斧を振うのだ。

われわれは、この突発的な行為が意味するものを明確にしておく必要がある。彼は悪を引き受けるという恐るべき試練に耐えてまでも自分だけが背負うことを許された使命を果たそうとしたのでもなければ、辛島に殺されるにしても、それは自己の存在に刻印された罪に服することだという存在論的な自覚に基づいて辛島の前に身を投げだしたわけでもない。偶然にもその場に人影がなかったという事実、これこそが、突発的な殺人行為へと駆り立てる外的な条件であったことがそのことを暗示している。つまり、彼は、おのれの底に秘められた形而上的欲望を発散しうる機会を偶然にも手にすることによって、生きて存在することを強烈に感じさせるあの恍惚とした瞬間に身を置こうとしたのだ。彼は、精神的な諸力の権限を凍結状態にする生の本質力に身を委ねたのだ。杉とは、生きて存在する

という人間存在の根元のもつ暗い底知れぬ力だ。

この突発的行為は、思いがけぬ偶然によって、結局は、殺人行為とはならず終わるのだが、しかし、そのことは、この男を深い混乱や恐怖や不安のなかに置くにしても、彼を無罪放免するわけではない。彼は、この行為によって、事件から身を引くことができない地点にまで追いかまれる。死につつある辛島を見守る行為は、この世で自分だけに許された行為だ。彼は、自己の存在が世界のうちに固く結びつけられているのを知る。辛島の死は、杉の存在を脅かすかのような。だが、彼に脅威を与える人物は、辛島のほかに、少くとももう二人はいるはずだ。この二人は、彼の犯行の動機を証言する可能性を秘めている。ところで、彼の無罪を立証する人物は、存在するのだろうか。犯罪を目撃した人物がいなかった事実は、かくして無罪を証言する人物の不在を意味することになる。起こりうる疑惑や誤解や邪推が、すべて彼を犯人に仕立てあげる証言となるのはほぼ間違いないであろう。恐るべき世界だ。彼は、疑惑を生む証拠物件を隠滅しようとし、彼に脅威を与えるあの夫婦に救いを求めるといふ醜態を演じることになる。辛島の死をめぐる一連の出来事は、作中人物の位置を大きく変質させたようだ。奴隷にも等しい旧商業ブルジョアジーは、いまや杉の支配者へと変貌する。杉は、三人の人物と切り離しがたい関係をもってむすびつく。彼は、自己の置かれた状況に恐怖と不安を感じる。彼は、いかなる手段に訴えても、この状況から逃亡しなければならぬ。私は一刻も早く、上海を去りたかった。辛島の血で私の手を汚した、この上海の街を離れたかった。だが、日本へ帰ることが、どんな解決をもたらすので

あろうか。彼に逃避すべき場所など存在するのであろうか。なぜなら、彼の不安や恐怖は、法的に無罪が立証されることによって解消されるものではなく、生きていくという形而上学的な次元で問題にされるべき性質をもっているからだ。

杉は、日本に帰国することが、いかなる解決ももたらすものではないことに徐々に気づきはじめる。辛島の死とそれに続く夫の死、そしてこの美しい人妻と結びつくこと、これらは杉の罪を蔽い隠し、彼を新たな生活へと導くはずのものだ。しかし、それらはどんな解放感とむすびつくこともない。それどころか、こうした事態は、殺人者であることを認識させることになる。辛島と夫の死は自己がこの世界に生きることを可能にすることだ。彼にとって、この世界に生きることは、罪そのものであるかのように感じられる。彼は、辛島と夫という二人の死と深く結びつくことで、罪の意識を実存意識に強く結びつけ本来のものにする。彼は、もはやどこにも逃げ道を求めることはできないし、罪を贖うためのいかなる手段を見つけ出すこともできない。世界は、まるで、よるべを失った非情さに包まれているかのようだ。

引き揚げ船の中で彼の眼が捉え、肌身で感じる自然の姿は、彼の精神的仮死状態にあったときに彼が目にしたものとは、およそかけ離れたものだろう。それは、彼が自己と世界の根底に着地する新しい経験の次元（Ⅱ転生）に滑り込んだことを暗示している。彼は、自己の存在が、むき出しになっているのを感じる。

人間の生ける営みのいっさいは、もはや、他者を排除し消滅させ

る苛酷な情熱と冷酷なまなざしによって動かされるものに思われる。だが、人間としてこの世に生きる以上、どうしてこの悲劇的な抗争を担わずにいられよう。傍観者などというものは存在しないのであり、あるのは、抗争の中にあつて独自の役割を遂行する自己の忘却だけだ、というわけである。

もちろん、われわれは、こうした認識に対してつぎのような異議を唱えることができるだろう。つまり、あらゆる人間の営みを悪と規定してしまうとき、善悪の基準は存立の基盤を失い、代わりに、すべてが許されるといふニヒリズムを招く恐れが生じると。人間にとって可能なことと不可能なことを冷徹に弁別したメルロー・ポンティが、形而上学的悪の絶えざる否定、つまり価値創出の運動を善とし、それに逆らういっさいの動きを悪と規定することによって、価値創出の運動こそが他者の犠牲なしには何ごともしえない人間という有限な存在者に許された唯一の起死回生の道であると断じてみせたように、主人公もまた支えるべきものを悉く喪失した虚無的状态からの打開を試みなければならぬ。

代書屋が、生きていることの全体が苦であると断言し、苦に充ちた人間的世界を生き抜き耐え抜こうとするのは、まさしくこのときである。人は、こうした主人公の選択をアングリマーラの生き方になぞらえるかもしれぬ。それはほぼ正しいだろう。忘却と背信の底にあったアングリマーラが、《耐え忍べ》という仏陀の言葉を生のイデオとして蘇生するあのドラマは、杉がわれわれに黙示した未来の選択と結縁性をもっている。

アングリマーラが、自分にむけて為される様々な復讐の苦痛に耐

え抜くことに生の意味を見出しように、杉も呪われた現存をおのれの住みかとする精神的苦痛に耐えることに、生の意味を求めようとする。それは、救済の可能性も逃げ道もない、生きることが自己を罰することでもあるような新たな実存の選択である。いかなる光明も存在しないことが光明であるような矛盾のうちに捉えられる生の在り方である。

『蝮のすゑ』の主題は、存在論的抗争とその超克ということができる。作中人物は、自己自身の矛盾に悩まされるとともに、他者との矛盾にひどく苦しまねばならない。そのような苦難をつくっているのは、彼ら自身なのだが、それを受苦するのも彼らなのだ。いやこの言い方は、正確ではない。彼らは、存在論的抗争を担いつづけるという条件のもとで、生きることを許されている。

武田泰淳は、敗戦直後の都市上海における愛欲のドラマを極限化することによって、このようなわれわれの日常的世界の背後に隠された目に見えぬ枠組に明確な形を与えようと企てた。彼の創作態度の根拠となっているのは、非日常的世界こそが、日常的世界を明示するという確信だが、それは、想像力による醇化の運動と呼応し合うことで、彼の思索をまさしく文学的思索とでもいうべきものになっている。われわれが文学的思索と呼ぶものは、思想による芸術の否定であるとともに、芸術による思想の否定でもある弁証法的な性格をもつものなのだが、武田泰淳の作品は、そうした精神の運動を通して紡ぎ出されるのだ。われわれが独自の会話と呼んだ数々の奇怪な対話、存在感の喚起に主眼を置いた描写方法、緊張した対立関係に置かれる作中人物の配置、そして極限状況の設定や分裂矛盾す

る作中人物の生にいたるまで、すべてが、存在論的抗争を浮きたたせ、それを打開しようとする探究の精神と深く結びついている。

われわれの主人公は、まさしくこの存在論的桎梏を断ち切ろうとする力として登場する。もちろん、こうした運命は、独り汚れない下宿で酒びたりの生活をつづけ、世俗的な価値に徹頭徹尾従っていないが、一方で滑稽さと虚偽を含んだ脆弱な知識人意識を玩ぶこの狡猾で卑屈な代書屋には思いもよらぬものだが、極限まで歩もうとする作者の精神の膨張力に導かれながら、主人公は、この酸鼻をきわめた抗争を打開する道を求めて、他者を排除し自己を生かそうとする運動に身を委ねた都市上海を彷徨うのだ。

武田泰淳の創造的努力は、モラリストのそれでもなければ、政治的文学者や芸術的ディレッタントのそれでもなく、まさしく文学的思索家の努力である。自己で在ることもできなければ、自己で在ら

ぬこともできぬ人間存在の運命とそこからの脱自を、彼は、晩年の大作『富士』に至るまで探究しつづけるのだが、『蝮のすゑ』は、そのような難題を形而上学的思惟と芸術的営為との融合によって切り開き、おのれの文学的思索が踏破すべき固有の領域を見究めたという意味で記念碑的な作品であるとともに、創造的営為のもつ苦難を自己に課すことによって、死ねないために生きている醜悪下劣な自己の死を創り出すという恐るべき営為の幕あけを告げる作品でもある。

(了)

△参考文献▽

『蝮のすゑ』小田切秀雄 『武田泰淳論の試み その二』小笠原克、『武田泰淳論』立石 伯 『武田泰淳論』松原新一

(一九八七年大学院修士課程卒)